学術小説

外島という人がいた！

赤瀬川原平

ちくま文庫

ちくま文庫

学術小説 外骨という人がいた！

一九九一年十二月四日　第一刷発行

著　者　赤瀬川原平（あかせがわ・げんぺい）
発行者　関根栄郷
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―六―四　〒一一一
電話東京五六八七―二六八〇（営業）
五六八七―二六七〇（編集）
振替口座六―四一二三

装幀者　安野光雅
印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取替いたします。
©GENPEI AKASEGAWA 1991　Printed in Japan
ISBN4-480-02572-3 C0123

子供小説 外骨という人がいた！

赤瀬川原平

筑摩書房

目次

はじめに／尾辻克彦 ―― 7
宮武外骨ってこれ、人の名前か何なのか ―― 22
スコブルおかしな雑誌である ―― 41
入獄四回、罰金と発禁で二十九回 ―― 62
むしろ滑稽投票を可とす ―― 81
私はまだ女子大生にはなりたくない！ ―― 102
私、ついに外骨となる！ ―― 116
いよいよ「滑稽新聞」である ―― 130

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

紙の上のパフォーマンス——150
文字のツラで意味の世界をぶっ叩く——186
死とエロス、そして死とグロス——217
闇に隠れた門の中の音は見えない——254
明治空間へのワープ——285
外骨先生かく語りき——337
あとがき——370
文庫版のためのあとがき——373
解説／中野翠——377

学術小説

外骨という人がいた！

はじめに

白水社の人からはじめて電話をもらったのが、一九七九年の、たしか五月ごろである。電話の内容は、

「宮武外骨（みやたけがいこつ）のことで、ちょっと……」

と言うものだった。

私は「ちょっと……」と言われて、ちょっと戸惑った。白水社といえば外国語、とくにフランス語を思い浮かべる。フランス語というのはハイカラであり、上品で地味で落着いている。しかし一方の宮武外骨といえば明治、大正に活躍した和服姿の日本人で、しかも派手な、犯罪を構成するほどの目立つ言動のあった日本人である。この両者の結びつきがどうにもよくわからない。まるでフランスパンに鰺の塩焼き、といったあんばいである。

しかし相手は出版社だ。それが「ちょっと……」と言うからには、やはり用件は文章化のことであろう。宮武外骨のことを何がしかの文章に書くという、そういう仕事の電話に違いない。私の頭の中に、

「グィーン……」

といってシャッターが降りて来た。私の脳ミソの拒否反応である。学校の嫌な児童が、登校時間になるとお腹が痛くなる、あれと同じ原理だ。頭の中のシャッターはグィーンと降りつづけて、頭蓋骨の下のところでガチンと止った。私は電話に向かって、

「外骨のことは、ちょっと……」

と答えていた。これは拒否を伝達したのであるが、その拒否のつもりが「ちょっと……」と語尾が濁るところに、まだ拒否しきれない問題が残されている。しかしこのあたりはじつに複雑な事情があるのであって、その複雑さをこれからの連載でいろいろと分析していこうというわけであるが、そのときはまだ「ちょっと……」という語尾の濁りがあるのみであった。

何か持って回った言い方で恐縮なのだけど、これにはいろいろと深いわけがある。外骨のことを書く、ということについては、何度か苦い思いをしているのだった。外骨がつまらないのではない。凄く面白いのである。明治、大正、昭和と、宮武外骨が雑誌表現の仕事で残しているものは猛烈に面白い。だからそれについて書いてみたいことは山ほどもある。

だから何年か前、はじめてある雑誌から、

「宮武外骨についてちょっと……」

と言われたときには、即座に書くことを引受けた。待ってましたという感じである。で早速原稿用紙に向かったわけだが、これがどう書いていいのかわからない。さあ書こうと

思って鉛筆を持ち（当時は万年筆だったかな）、山ほどもあるはずの書くことを頭の中に陳列しながら、それをどこからどう書いていいのかまるでわからないのだ。

私はその現象に驚いてしまった。書きたいことが書けない。それはままあることではあるが、しかし面白く感じたことをそのまま端から書いていけばいいのに、その端というのがどんどん先にひろがっていって、どこから書いていいのかぜんぜんわからない。つまりAの面白さを書く前にBについて書く必要があり、そのためにはCについても書く必要があり、とするとDについても書いておかなければならない。とそういう具合に、糸口がずるずると深入りしていき、もはや簡単には引き出しようがなくなってくる。

私は外骨の雑誌表現の面白さというものを改めて考え直してしまった。私は外骨の表現が面白いので、いままでその雑誌類を古書市などで買い集めてきた。それを友人たちと眺め合いながら「面白い、面白い」と言い合いながら、その文章やイラストレーションのさまざまなやりくちに驚嘆していた。そうやって面白さがはっきりと目に見えてあるのに、その面白さを文章に出来ないとはどういうことか。私の力量の問題ではない。ちょっとそれとは違うのである。

要するに、その雑誌表現の面白さというのが、そこにある雑誌環境や、そのときの人々の日常意識や、その時代背景や、そういった周りの細かい事柄のすべてに深く浸透してからまっているからだと思う。だから糸口を引っ張り出せばズルズルと時代環境が限りなく出て来てしまい、かといってその一部を切り取ってみれば、その面白さというのも切り取

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

られて消えてしまう。

たぶんそういうことだ。

私は結局、その外骨に関する最初の原稿依頼に応えることができなかった。その旨をその雑誌社の人に伝えると、その人は、

「うーん、しかし……」

と電話の向こうで唸っていた。それまでにも何度か会って、私が外骨の表現に面白がっているのを知っていた人なのである。だからそれを書きさえすればいいのに、何故書けないのかと、理解できない雰囲気である。しかし私としてもやはり、

「うーん、しかし……」

と答えるほかはないのであった。結局その原稿依頼は、言葉の後に「……」を残しながら去って行った。

ところが宮武外骨の仕事についてはあまり書く人がいないようで、その後ほかからも外骨についての原稿依頼が飛び込んできた。私の場合、自分の本の『櫻画報』の扉に「宮武外骨先生に捧ぐ」という献辞を載せたりしたものだから、よけいにそんな依頼が来るのだった。

しかし私も外骨の仕事に引き寄せられるだけあってけっこうしつこいタチのようで、外骨の最初の原稿に挫折したのが悔しく、次の別の雑誌から同じ依頼が来ると、ようし、今度こそはと、また性懲りもなく引き受けたのだった。

だけどものごとというのは組合せが同じである以上、出てくる答えが変るわけもないのであって、私は白い原稿用紙を前にして、またもやその糸口だけを追い求めて、さらなる苦闘の日々を送ったのだった。

でそんなことがその二回だけではない。今度こそは、今度こそはと、私は同じ苦悶を何度も繰り返すことになってしまった。それは一九七〇年代という時代のせいもあるだろう。時代はアウトロウの光を求めて、昔の時代に活躍したという怪しげな宮武外骨を知ろうとしてやまなかったのである。だから私だって報告しよう、報告しようと努力してやまなかったのであるけれど、しかし度重なる挫折の末に、結局は本格的な挫折の境地に行き着いたのだった。もはや宮武外骨のことを書こうと思うのはやめようと決めた。外骨は面白い。でもそれはなまじ文章には書きようもない。美学校の生徒にスライドで見せるだけで、あとはどうにもしようがない。

そう決めてからは気が楽だった。外骨についての原稿依頼は、頭から断わればいい。

「いやあ、外骨はちょっと……」

などと言い淀むから難しくなるのであって、頭から、

「駄目です。外骨は書けません！」

と断わってしまえば、これは明快である。

それから私は明快だった。外骨は頭からズバリと断わればいい。

しかしこう書くと、これは連日のようにあちこちの新聞雑誌から外骨についての原稿依

頼がとめどもなく押し寄せていたみたいでもあるが、それほどでもない。結局断わったのは全部で三回ぐらいではないだろうか。

しかしやがて時代は過ぎて、外骨についての原稿依頼の電話も来なくなった。世の中は従順な雰囲気にしずまっていき、アウトロウの光も、アウトのままに沈んでいったのである。私はもはや外骨のことを書くことはないだろうと思い、何年かの歳月が流れたのだった。一九七〇年という年代も、その本体は歴史の彼方に過ぎ去って行き、その末尾の一九七九年になっていたのであった。その五月である。白水社から電話があったのは……。

ずいぶん長くなったが、そうやって私は、死んだ子の歳を数えるようにして、というのともちょっと違うが、とにかく久し振りに外骨問題に戸惑ったのである。久し振りであったせいか「即座に断わる」というワザが出て来ない。それに白水社に外骨という、フランスパンに鯵の塩焼き的な奇妙な感じに、

（あれ？）

と思わされて、私は考え込んでしまった。いったいこれは何だろうか。

とはいっても外骨はやはり外骨であり、私の鉛筆は金縛りのままである。もう過去にさんざん苦悶を重ねてきたのだ。その思いが電話の返事となって、先述のごとく、

「外骨のことは、ちょっと……」

となったのであるが、しかし先方はそれを単なる外交辞令と受取ったふしもあって、

「とにかくですね。その外骨のことで、ご相談、いただけたらと思いまして、ぜひ一度、

お会い、いただいて……」

と反論している。

私は国分寺の駅の近くまで出かけて行った。やはり外骨のことは、断わるにしても電話ではムリだと考えたのである。一言では断わりきれない。やはりお会いして、じっくりと断わらなければならない。それにフランスパンと鯵の塩焼き、いや、白水社と外骨との取り合わせが妙に気になり……。

で、国分寺の喫茶店でITに会った。ITというのはI氏とT氏の二人であるが、以後外骨問題でお会いする際はいつもこのお二人である関係もあり、ITという一つの人格にまとめさせてもらった。

ITの要請は、やはり外骨のことを文章に、というものであった。話によると、ITは私の著書によって外骨を知ったということである。先述のように、私は『櫻画報永久保存版』（現在は『櫻画報大全』と改訂）を宮武外骨に捧げているし、その中の主筆デスク日記には外骨発見のところが記載されている。それともう一つ『追放された野次馬』の馬オジサンと泰平小僧の対談の中では、外骨のさまざまな著作についての紹介をしている。たしかに若い人の場合、そんなもので外骨を知る以外には、宮武外骨なんて名前は耳にはいりようもないわけである。でいったん知ってしまうと、もっと知りたいという欲求が生れてくる。

「で外骨のことを自由に書いてもらって、出来れば一冊の本にまとめたいと思うのですが

……」

とITは言うのだった。この場合「自由」というのが問題である。いまでも「自由に」と言われて書けなかったのだ。むしろ外骨というのは自由に書こうとすればするほど、糸口がひろがりすぎて鉛筆の先が金縛りにあってしまう。そのあたりを私は、

「これこれ、しかじか……」

といままでの体験をふまえながら、綿密に説明して断わっていく。これは複雑な問題だから、綿密に説明しないと断わりきれない。しかしその説明のテーマというのは、いかに外骨が書きにくいかであり、それの説明の綿密さというのは、外骨の表現がいかに面白いかということに、どうしてもなっていってしまう。そうすると、

「いや、面白いですねえ。いや、ですからね、そういうことを自由に、書きやすいように書いていただけると……」

とITから言われることになり、私はまただんだんと外骨を書くハメの落し穴に落ち込んでいくのであった。

ただ落ち込んでいきながら、一つ閃めくものがあった。いままでは外骨のことをしっかり書かねばならないという責任感だけがあったのだけど、そんなもの棄ててしまえば意外と楽に書けるのではないか。自分が外骨のことを面白がっている、その自分のことを中心に、外骨そのものはオマケぐらいのつもりで書いていけば、かえって外骨の表現の面白さの特質というものが浮かび上がってくるのではないか。

「そう、そうです。もうその辺は本当に自由に書いていただいて……」

私が講師で行っている美学校では、外骨の「滑稽新聞」をスライドにしてみんなで見ている。現物を前に話をすれば、あれこれ挫折することなく、面白さの意味はストンと通じる。活字なしの真っ白い社説のページなど「うわっ、現代芸術！」などと言ってみんなで面白がっている。その雰囲気をそのまま書けばいいのではないか。

「いいですねえ。それ、絶対に面白いですよ。その方がかえって身近なものになるし、読者にも伝わりやすい……」

だからその場合は外骨の図版だけじゃなくて、たとえばそこに共通する現代芸術の方の図版もバンバン入れていくとか。

「それは面白いですよ。いやそれでいいですよ、外骨の伝記を書くというわけではないんですから」

「そうですよね、伝記的な側面はいずれ誰かちゃんとした人が書くだろうから、僕の場合はその表現の面白さということだけに限って……」

「ええ、それです。僕らもその外骨の面白さというのがいちばん知りたいところで」

「そうか、なるほどね、むしろ現代芸術なんてもう外骨がやっていたっていう、そっちに重点を持ってくりゃいいわけだ」

「いや、ホントそうなんです」

「その方がくだけて書けますしね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com